

原三溪の漢詩を学ぶ ～ ケーススタディ2

12月には特別研究会として、7月に引き続き「原三溪の漢詩を学ぶ」を開催しました。併せて、有志による漢詩研究の報告もありました。

◆原三溪の漢詩を学ぶ ～ ケーススタディ2 原三溪作「清風居」

発表者：廣島亨

ゲスト：鄧捷（関東学院大学 文学部比較文化学科）

藤本實也著「原三溪翁伝」に記載されている五言律詩です。清風居は現在三溪園にある白雲邸を指します。

林屋風塵外 閑庭長柴芝 花開判曆日 潮落ト炊時
只許白雲宿 独客明月窺 好晴採薬去 夜雨輒吟詩

世間の煩わしさから離れた静かな環境の中で、自然に親しみながら日々のくらしを楽しむという大意ですが、関東学院大学鄧文学部教授にご陪席頂き、下記の通り貴重なコメントを頂戴しました。

- 1) 6句「独客」は明月とイコールの意。従って訓読は「独り客明月を窺う」でなく「独り客明月窺う」が相応しい。
- 2) 5句は昼、6句夜、7句昼、8句夜、が対になっていて味わい深い、等など。

しかし私達の謎は更に深まるばかりです。「三溪集」（原三溪作の漢詩作品集）には、同じ詩が異なる題「無心山荘」で、記載されているのです。無心山荘は現在箱根強羅にある白雲洞で、原三溪の別荘でした。何故、異なる題名で同一の詩が詠われるのでしょうか？

原三溪市民研究会では、この度漢詩研究分科会を正式に発足することにしました。これからも更なる注力をもって、原三溪の漢詩に精力的に取り組んでいく所存です。（廣島）



漢詩と漢字とイメージ

漢詩がやさしいということはないが、漢字という表意文字の持つイメージの伝達力には改めて見直すことが多い。それを日本と中国という異なった文化に生まれ育った人間が同じように感じたり、微妙なところでは逆に感じたりするところも面白い。

今回取り上げた「藤澤途上呈石原明府」は、たまたま三溪の身近に起こった出来事を綴った叙事詩的な世界で、三溪が作った漢詩の中では珍しい種類に属する。花鳥風月に託して自分の心境や人生を詠うのではなく、絵画的なイメージの中に出来事を散りばめて、あたかも中国のある時代の官僚の世界を見ているような気にさせる。しかし一つひとつ「謎解き」をしてゆくと、一人の実業家と一人の官僚の、この時期の重要な動きがあぶり出され、「日本近代史をのぞきみる」スリルを味わうことになった。これはやはり漢詩の背景と漢字の豊かな伝達力を熟知した三溪の技に負うところ大である。（藤嶋）